

## 記録更新とドーピング～何がアンフェアなのか～

新潟大学・山崎 健

### はじめに

9月に終了したシドニー五輪での、ルーマニア・体操女子ラドゥカン選手の金メダル剥奪は、開会式での「ドーピング追放」を盛り込んだ異例(?)の選手宣誓を象徴するような出来事であった。また、開会に先だった9月6日、中国五輪委員会は、ボート7人、陸上14人、水泳4人、カヌー2人の27選手をエントリーリストから除外するとの報道があった。陸上競技では、「馬軍団」の女子中長距離選手6名が含まれていた。また、男子砲丸投げのハンター(米国)や女子ハンマー投げのメリンテ(ルーマニア)らのメダル候補も、事前にドーピング検査で陽性反応(筋肉増強剤のナンドロロン)が出て資格停止となっている。

そして、オリンピック終了後のパラリンピックでも、ついにドーピングが発覚した。パワーリフティングに続いて、陸上男子200mのフレイジャー(米国)がドーピング反応陽性で銀メダル剥奪と4年間の出場停止(100mでは陰性だったのでその後の使用が疑われる)の処分を受けることとなった。パラリンピックの競技レベルの向上とプロ化の波が、感動的とも言えるパラリンピックに『影』を落とし始めているのも事実である。

パラリンピック終了後に、次のような新聞報道が載った。

『選手強化へ課題は山積み - 「福祉」脱却がカギ』(シドニー29日共同) 競技レベルが年々向上する障害者スポーツ。日本が世界のトップレベルから取り残されないためには選手強化を進める以外ないが、課題は山積みしている。

「バタフライの泳ぎ方は教えられるが、どうすれば遠く泳げるのかを教えるのは手に余る」。

競泳の成田真由美選手をかつて指導した障害者スポーツセンター「横浜ラポール」の八重樫通晴指導員の話だ。「専門家でなければ、トップ選手の指導はできない」・・・(中略)・・・選手を取り巻く環境も大きな課題の一つ。陸上重いすの銀メダリスト広道純選手は、勤務する大分県別府市のホンダ子会社から遠征費などの支援を受ける一方、米航空会社などの個人的なスポンサーを持つ。「その代わり結果を出さなければ」。二週間後に地元で開かれる大分国際車いすマラソンをパラリンピックより重視、シドニーでマラソンに出場しなかった。「プロ意識を持つ」広道選手のような存在は、欧米では当たり前となりつつある。(以下略) 記録更新への挑戦とプロ化の波は、商業主義をも含めて、パラリンピックにも押し寄せている。

### 女子選手の活躍とトレーニングシステム

今回のシドニー五輪女子陸上競技では、ベテラン選手達の活躍が光った。40歳のオッティ(ジャマイカ)が100m 4位、4×100mRでの銀メダル、35歳のドレクスラー(ドイツ)が走幅跳で金メダル、39歳のズヴェレワ(ベラルーシ)が円盤投げで金メダル、34歳のハッテスタット(ノルウェー)がやり投で金メダル、その他も30歳を超えるベテラン選手のメダル獲得が印象的であった。

このことは、事前に予想されていたことでもある。ベテラン女子選手活躍の要因には、①プロ化を含めたサポート体制の充実、②スポーツ医学の進歩によるトレーニング管理と障害の治療や予防、③クレアチン等に代表される「サプリメント」の摂取による疲労の回復促進、④身体コンディションの維持と豊富な経験の蓄積による安定したパフォーマンス、などがあげら

れている。

しかし、今回活躍したオッティやズヴェレワは、かつて薬物使用の陽性反応が出て出場停止処分を受けていたいきさつもあり、また水泳での短期間での脅威的記録更新に関わっての薬物使用の疑いは消えない。

確かに、「〇〇軍団」と称されるトレーニングシステムは重要性である。宮下は、競技力の向上とコーチ・指導者の役割について、①指導者は、自分の専門とするスポーツ競技の特徴を明確に意識しているべきである、②指導者は、選手の成長段階を考慮し、個人の特性に応じた指導を行うべきである、③指導者は、完成された選手の活躍を演出するブレン集団（医師、栄養士、マッサージ師／アスレティックトレーナー／ゲームアナリスト）を組織すべきであると指摘し、特に③の問題の重要性を指摘する。

（宮下充正、日本のスポーツ、勝利への選択、コーチングクリニック Vol. 6 (9)、1992年）

また、練習 - 滞在環境の確保の問題もある。長距離種目の高地トレーニングや「低酸素居住 - 平地トレーニング」など、従来では考えられなかったような様々なトレーニング法が考え出され実践されている。これらは、スポーツ医学の発展の成果でもあるが、もっぱら財政的サポートによるチーム維持ができなければ実現しないものである。50mプールすらない小国では、十分なサポートを受けることすら不可能であり、100mの記録がパラリンピック以下であってもやむを得ないともいえる。シドニーパラリンピックでの地元オーストラリア選手団は、企業スポンサーからのサポートも受け、国立スポーツ研究所等でオリンピック選手と同等の医学サポートを受けることが可能となり、競技力向上に大きな貢献を受けたことが放映された。

### ドーピングとは？

スコットランドの現代作家マグナブの小説で、禁酒法時代のトランス・アメリカ・フットレース（ロスからNYまでの約5000kmを走る）を

題材とした「遥かなるセントラルパーク」という秀作がある（飯島宏訳、文春文庫、1986年）。この中で、架空の話ではあるが、トップを独走するナチSSチームがコカインを使用していたが、雪のロッキー山脈で心臓麻痺を起こして倒れるというくだりがある。作家は、トランス・アメリカ・フットレースという気の遠くなりそうな苛酷なレースに、一癖も二癖もあるものの「普通の人間」である主人公達が、さまざまな想いを抱いて挑むことを讃えている。

黒田は、競走馬から始まりスポーツ競技者に使用が拡大してゆくドーピングの歴史を概観しながら、ヘロイン、モルヒネ、コカイン、ストリキニン、カフェインなどの薬物が使用されるようになったのは19世紀後半からであることを報告している。そして、1886年に自転車レースでの最初の死亡例が報告され、その後も自転車選手を中心に事故が続き、1960年のローマオリンピックの100km団体ロードレースで、デンマークチームが興奮剤のアンフェタミン等の使用により1名死亡、2名入院という事態が報告されている。そして、1950年代からは、現在も「主流」の筋肉増強剤が登場する。

（黒田善雄、ドーピングとは何か—その歴史と現状—、臨床スポーツ医学第11巻臨時増刊号、1994年）。

寺沢は、ドーピング禁止薬物と禁止理由について、以下の副作用の存在とその危険性を指摘する。

1)興奮剤：覚醒剤取締法により厳しく規制されており、中枢神経系を刺激して敏捷性を高め、疲労感の低減と心理的効果をもつが、正常な判断力を失わせてアクシデントの危険を招く。また、副作用として、振戦、不安、不眠、発熱、錯乱、激越があり、中毒性精神病や高熱による死亡も報告されている。2)麻薬性鎮痛剤：モルヒネとその関連物質であり、強力な鎮痛作用をもつが、呼吸機能の低下等の副作用と身体的・精神的依存を引き起こし、麻薬に指定されている場合が多い。3)蛋白同化剤：筋肉増強剤として、筋力、筋肉量を増し闘争心高める目的で乱

用されている。黄疸、肝臓疾患・癌の発生、心血管系障害、女性の男性化と男性の無精子症、インポテンツ、小児での成長停止等の副作用をもつ。4)利尿剤：排泄尿量の増加による使用薬物の希釈と体重減少の目的で乱用されるが、急激な減量と循環系と水分・電解質代謝に影響を与え、致命的な結果をもたらすことが指摘される。5)ペプチドホルモン：内因性男性ホルモンの生産量増加のためのテストステロン投与と同等の効果を持ち、また、炎症を抑える副腎皮質ステロイドの使用と同等と判定される。成長ホルモンも含まれるが、アレルギー、糖尿病の誘発、末端肥大などの副作用をもつ。6)血液ドーピング：特に持久的能力の向上のため、本人または他人の赤血球を輸血する。アレルギー症状、黄疸、不適合輸血による急性溶血と腎不全、代謝性ショック、肝炎やエイズ感染等の有害作用が発現する。7)薬理的、化学的、物理的不正操作：検査を妨害する目的の操作と薬物。8)アルコール。9)大麻。10)局所麻酔剤：麻薬性以外で治療目的以外の使用禁止。11)副腎皮質ステロイド：抗炎症作用があり疲労感や疼痛を軽減させるが障害の慢性化につながる。陶酔感や重篤な副作用があるので治療のための局所使用以外は禁止されている。12) $\beta$ -遮断剤：高血圧、不整脈、狭心症の治療に使われるが、不安解消や「あがり」の防止、心拍数と血圧の低下で身体の揺れを少なくするため標的を狙う競技で使われる。持久性種目では競技力が低下する。(寺沢孝明、ドーピング禁止薬物・禁止方法の分類と禁止理由、臨床スポーツ医学第11巻臨時増刊号、1994年)

### 何が「アンフェア」なのか？

ベン・ジョンソンの服用で脚光を浴びた経口摂取のタンパク同化ステロイド(スタロゾール)は、長期服用の弊害として肝臓障害、黄疸、前立腺肥大、消化管出血、精子減少、動脈硬化、高血圧、心疾患、成長停止(ジュニア期の服用)、性格の変化等々が指摘され、長期的には選手生命に影響を与える副作用があるもの

と考えられる。

しかし、現在は副作用の少ない注射でのトレーニング期の使用が行なわれており、副作用も管理され、使用痕跡の巧妙な隠蔽操作もあると指摘されている。

1994年の広島アジア大会での中国選手の大量発覚(11名)で、中国側は個人的使用と声明を出しているものの、旧東独からのコーチングシステムとともに組織的に使用されていたのではないかとの疑惑は消えない。特に、注射によるステロイド使用は医師の処方なしに個人的に使用することは不可能と思われる。また、筋のタンパク同化を促進し同時にテストステロンの使用痕跡を曖昧にするとされたデヒドロテストステロン(DTH)は、当初の禁止リストにもなく、また体内摂取に使われた「朝鮮人参」は、組織的な漢方研究の成果ではないかとの疑惑が残る。アジアの大国・中国の「軍団」と表現される組織によりサポートされる「アンフェアさ(他の小国では政治的・経済的・社会的支援体制が不可能であるから)」は重大な問題である。

トレーニングシステムとスポーツ科学が発達した現在では「個人的レベルでの使用」は現実的ではないし、入手できる薬物も効果もたかが知れている。現在では、かつてのように風邪薬のうっかり使用でドーピング疑惑がかかることもありえない。チームドクターの仕事の半分以上は選手の服用する薬の種類のチェックであり、その意味からも、今回のラドゥカンの「風邪薬のうっかり服用」などは考えられない問題(あまりにも初歩的で他の原因を疑いたくない)である。

では、もしも、悪魔に自分の『影』を売ってしまうような「最高のパフォーマンス」を求めるとは、どうなのであろうか？

結論的にいえば、我々は「突然現れた異星人」には、驚愕はするが感動はしないのはいか、つまり、我々は、トレーニングのプロセスや記録向上への「人間的な営み」を含めて「感動する」のではないだろうか？

1988年のソウルオリンピックでは、薬物を使用してしまったベン・ジョンソンと使用しなかったカール・ルイスや他の選手との興味あるデータが報告されている（陸上競技マガジン、1988年11月号）。

9秒79のジョンソンと9秒92のルイスとのタイム差は、ほぼ30～60mの間の差でありラストの40mはジョンソンの3秒46に対してルイスは3秒44で走っている。しかし、ジョンソンは、30～60m区間を5.02歩/秒、それ以降90mまでを4.84歩/秒という驚異的ピッチで走り、全区間を通して4.76歩/秒で走っている。ルイスはこの30m区間を4.84歩/秒、全区間で4.40歩/秒であり、他の選手も4.39～4.55歩/秒である（参考までにローマの世界選手権のジョンソンの9秒83のときも4.72歩/秒と高い）。つまり墜ちた偶像・ジョンソンは「人間業とは思えない驚異のピッチ」で走っていたのである。

現代のスポーツ科学は、スピードの決め手は高いピッチを維持できることを示唆している。ジョンソンはまさに、スピードを得るための最適なトレーニングを「ある1つの間違い」を除いて完璧に実行していたこととなるが、実はすでに「異星人」と化してしまっていた。そして人類は、ジョンソンの9秒79に10年以上かかってようやく追いついたのである。

## おわりに

記録向上への限らない営みは、スポーツ医科学の進歩とともに、メダル至上主義や商業主義、「軍団体制」の維持やスタッフの生活保証やプロ化などの「負」の側面を引きずっていることは否めない。

ドーピングに使用される「薬物」の問題は、現実には現代医学と薬学の最新の成果と密接に関連し、高度な医療、副作用のない効果的な治療とリハビリテーションへの要求が生み出した人類の叡知でもある。その「叡知」と対峙しなければいけない現代のスポーツ医科学在り方はある種の「自己矛盾」と言えないこともない。

しかし、そのような「疎外」を生み出す背景とされる行き過ぎたコマーシャルイズムや成績至上主義といったシステムの存在は、逆に、スポーツによる人間的価値の実現に対して「悪魔のささやき」として敵対するものとなっているのではないだろうか。スポーツを行ない自己実現をはかるといふことは、まさに「人間的営み」以外の何者でもないはずである。

スポーツにおいて「不正（アンフェア）」を許さないということは、見るものも行うものも暗黙のうちに了承している不文律であろう。しかし、ドーピングは、医学やスポーツ科学の発展と密接に関わりかつ世界のトップレベルの競技者や競技会に「組織的」に入り込んでいるまさに現代的な問題である。

自分の『影』を売ってしまうことの「後ろめたさ」を感じるなどというロマンチズム

(?)では、現実には生き残っていけないのかもしれない。選手歓迎のパーティーに出席し、影がないのが自分だけかとビクビクしていたら、あっちにもこっちにも影のない輩が出没し、たまたま影の薄かった知り合いにこっそり事情を聞いたら「いや、実はバレないようにあいつから買ったんだ、おまえもどうだ？」などという『百鬼夜行』の世界は、スポーツの感動とは無縁のものであると強く願ってはいるものの、現実には、禁止リストに載っていない『サプリメントと称する妖怪』が跋扈（検査の好け穴を利用して禁止物質も使用？）しているのも競技界での「現実」である。しかし、それは「フェア」なのだろうか、それとも「アンフェアではない」のだろうか？